(2)ランゲフェルド　一九五六　子どもの人間学研究
マックス・ニーマイヤー書店　テュービンゲン
（実吉春夫訳一九七五　子どもの世界の中のモノ　月刊誌「幼児の教育」フレーベル館　一九七五年二月号）
(3)佐伯　胖　一九八二　イメージ化による知識と学習
東洋館出版社

言語障害の臨床研究ノート(5)

共有する

村上　敏子

〈テレビ番組セサミストリートによって気づかされたこと〉

最近、関心を持って見ているテレビ番組がある。「セサミストリート」である。一九八八年の製作とあるから、アメリカでは、二年も前に放映されたのであろうが、感覚を二年前に巻き戻さなくても、異和感なしに見れる。それどころか、人間のありよう、教育のありようを先取りしており、心が和むことが多い。

私の最初の職場に、アメリカの大学の修士課程で、言語病理学を学んで来られたK先生がおられた。そのK先生が、「セサミストリートは、学校教育を満足に受けられないスラムに住む子ども達のために製作された番組で

あり、覚えさせたい文字を点滅させたりして印象づけるように工夫されている。言語障害の子ども達に文字を教えるための教材のヒントになるのではないか。」と話されたことがあった。そこで、私は、当時通勤に利用していた国鉄大森駅前の書店で、セサミストリートの絵本を購入したが、極彩色の絵にどっきりしてしまい、それ以上深くセサミストリートに踏み込んで行く気にはなれなかった。

あれから十五年。この春から、英語会話の番組としての関心から、日曜日の夕方、「セサミストリート」のテレビ番組を見るようになった。聞くところによると、今、この「セサミストリート」は、非常に人気がある番組だそうである。確かに、より自然な形で日常生活の会話が聞けるので、「英語会話」の番組とも捉えることができるのであろうが、日本人、盲の男の子、車椅子の男の子、聾唖者の番組への自然な登場の仕方には、新鮮な感動を覚える。

車椅子の男の子と友達とのボール遊び、盲の男の子の一日の生活（普通学級で学んでいる）、聾の女性と他の大人達との引っ越し風景。私の仕事柄、聾の女性の登場の仕方について特に感想を述べるべきであろうが、番組を見ていて、「特筆することはない。」と思う位に、聾の女性の登場の仕方は自然で、彼女と他の登場人物は、自然にコミュニケートしているのである。聾の女性は、口話も併用しているが、声が聞き取れる程には出ていないので、手話が主なコミュニケーション手段であり、他の人々は、手話と話しことばとを用いていた。健聴者同士で話す時も手話を併用しているので、けげんに思うと、同じ場面に聾の女性がいるのである。話題を共有する、共有できない話題は持ち出さない、ということは、数人が居合わせた場合のエチケットであるが、話しことばが聞こえない人がいる場合には、情報を共有し、意志疎通を図るために、その場にいる人が話す場合には、当然、手話なり視覚的に捉えうるものを併用することが、最低限のルールとなるということであろう。私は、これ迄に二回手話講習会を受講し、必要な場合には使って来た。しか

し、私は大きな見落としをしていた。健聴者、聾唖者双方と一緒にいる時、聾唖者に話しかける時は、話しことばと手話を用いても、健聴者とは、話しことばだけでコミュニケーションしていたのだ。その意図はなかったにしろ、結果的には、健聴者間で話題を選択し、必要と思うことだけを、聾唖者に手話で伝える、ということをしてしまっていたのである。「セサミストリート」のその場面を見るまで、私は全く気がつかなかったのだ。聞こえない人がいる所では、その人に話しかける時だけでなく、聞こえる人に話しかける時にも手話を併用しないと、話題を共有できない人、その場から疎外された人を作り出してしまうことに。

何故、言語治療を行うのか。発音が日本語の音韻体系からずれた子どもには、発音を再学習させ、難聴の子どもや失語症の成人には、「聞く・話す・読む・書く」を学習させることが、何故必要なのか。私は、言語障害について集中的に勉強し始めた頃、時々迷うことがあった。各々が個有の世界を持っているであろうに、何故、健常者の側に引き寄せねばならないのだろうか、と。(もちろん、ことばの二大機能は、思考の媒介であることとコミュニケーション手段であることは知っており、その上でのことであったが。)

しかし、聾唖者の間に自然発生し、学校教育にはとり入れられないまま、根強く、聾学校の中でさえ主要なコミュニケーション手段として使われている手話を、健聴者が習得し、聾唖者との共通のコミュニケーション手段にしうる、ということを実際に体験してみて、「言語治療は健常者の奢りではないか。」という迷いは薄らいだ。お互いの共通のコミュニケーション手段を、学習可能な側が習得し、互いの意志疎通を図ればよいのだ。

聾唖者は、手話を使う健聴者を非常に信頼するように思える。それは、おそらく、相手を一方的に自分の方に合わせさせようとするのではなく、自分の方からも相手に合わせて行こう、という姿勢を持つ人だ、と感じるからではないだろうか。心を開くこと、これこそ、コミュニケーションの前提であろう。

私は、若い時には、外国語を読みはしても、話すことには、極端に臆病であった。最近、ある人が「外国語が上達する人は、人を受け入れることのできる人だ。」と言うのを聞き、納得するものがあった。若い頃の私は、家族から離れて暮らしていたせいか、ピリピリ緊張していた。その後の悪戦苦闘の二十数年間にもみほぐされて、私もやっと、異なる文化、異なる言語を持つ人々に心を開けるようになったのかもしれない。私が、外国語を話すのに抵抗を感じなくなったのは、四十歳を迎えてからである。

だが、「セサミストリート」に手話が登場する迄、私は、外国の人と接する時の不可欠の配慮の一つに気づいていなかった、と言ってよい。その場に居合わせた人々が、話題を共有し、情報を共有し、等しく機会を与えられることによって、安定した状態で心を通わせ合うためには、やはり、相手に合わせうる側が近寄って行くことが必須ではなかろうか。時には、日本人同士が外国語で話したり、外国人同士が日本語で話したり、というように多少無理をすることもあろうが、その場にいる人が共通に使えることばでコミュニケートする必要があるのではないだろうか。

このように考えると、人間同士が意志疎通を図り、多くのものを共有するための配慮というのは、「セサミストリート」の中でさりげなく示されたことに集約されるように思える。

〈言語学習〉

毎年の学生への講義で、「このことが、胸がときめくような壮大なことであることに気づく学生はいるだろうか。」と思いつつ話すことがある。それは、「言語体系は、記号と文法規則から成る一つの約束ごとの体系である。」ということである。

「ガリバー旅行記」ほど、幼児向けにその一部だけが意訳され、本来の作品とは全く異なった物語（多くは絵本）として一人歩きをしている作品は、そう多くはないのではなかろうか、というのが、私が初めて全訳版の

「ガリバー旅行記」を読んだ時の感想であった。

幼児向け絵本では省かれている作品の後半に、数年前、近未来を描いた作品として好評を博したアニメーション映画によって広く知られるようになった空飛ぶ島ラピュタが出てきたり、観念的な学者群が滑稽に描かれている。基本的には文明批評の書であり、作者スウィフトの旺盛な批判精神に終始貫かれている作品ではあるが、同時に、イマジネーションの豊かさ、学問的素養の深さにも感心させられる。本来は、決して「ファンタジー冒険もの」ではないのである。

さて、ガリバーが、ラピュタを降りて訪れたバルニバービの首府ラガードーの国語学校で三人の教授が自国語の改善について検討しており、その案の一つとして、「言葉をいっさい全廃してしまう」というのがあった。「言語とは要するに物の名だ」から、「話したいと思う用件を表すにぜひ必要な品物は、むしろ現物を持って行ったほうが遙かに便利だろう」というのである。

音声言語や文字語等の記号でコミュニケーションを図るのではなく、原点に立ち戻って、実物を呈示することで意志疎通を図ろうというのである。

この箇所を読んだ時、現在の人文科学のレベルは、スウィフトの生きた時代とさほど変わらないこと、難しく

語らなくても、スウィフトが言語学を軽く越えていることを感じた。

そうなのだ、どこの国のことばであれ、「これは、『机』と呼ぼう。」「これは、『鉛筆』と呼ぼう。」というように、実物の代わりに、それをさし示す共通の記号を使って表現するという約束が成立しているために、私達は、会話に必要な実物を持ち歩く必要はないのである。

幼児の言語発達の過程で、第一期語獲得期（第一質問期）と名づけられる時期がある。幼児は、満二歳近くになると、全てのものに名前があることに気づき、「（これ、）なあに。」と質問を連発するようになる。

この時期は、言語発達における一大転換期であり、幼児は、記号と文法とから成る言語体系という世界へ踏み込むことになる。このことで、幼児の世界は、大きく広がるに違いない。サリバン女史の著書『ヘレン・ケラーは、どう教育されたか』においても、ヘレンが、この言語世界の入口に立った瞬間が感動的に記されている。

「一八八七年四月五日　今朝とても大切なことが起こったので、あなたにどうしても一筆書きたいのです。ヘレンは彼女の教育で大事な第二歩を歩み出しました。彼女は、すべての物は名前を持っていることと、指文字が自分が知りたいすべてのことへの手がかりになるということを学んだのです。」もちろん、ヘレンの場合は、通常の幼児のように、物が音声言語に置き換えられるのではなく、指文字――文字言語によって、認知しうる全ての事物が置き換えられることを知ったのである。

それ以前（同年三月三十一日）にも、ヘレンが十八の名詞と三つの動詞を知っていることが、確認されているが、サリバン女史は、「ヘレンは今ではいくつかの単語を知っています。でも、それらの単語の使い方や、物にはそれぞれ名前があるということはわかっていません。（一八八七年三月十一日）」と記している。これは、順調に発達している幼児にも、始語期から第一期語獲得期（第一命名期）に至る迄の期間に見られることである。

このように全ての事物に名前があることを知ると、子どもは急速に語彙を増やし、それと共に、子どもの認知

する世界もぐんぐん拡大していく。共通の約束ごととして取り決められた呼び方を通して世界を認識していくわけであるから、子どもの言語発達は、即認識の発達であり、かつ、母国語を共有する人々と類似した認識の体系を形成していくことになると推測される。

「共通の言語体系を持つことは、共通の認識の体系を持つことである。」と考えると、言語学習、更には、外国語の学習も歓喜に満ちたもののように思える。しかし、現実はどうであろうか。外国語学習を開始する前に、外国語を学習する目的を明確に認識させることは必須である。この前提なしで、外国語学習を開始し、そのことばを駆使してコミュニケートしたいと思う相手も見かけることのない状況での学習は、方向性がない、孤立した空間での学習であり、大多数の生徒にとっては退屈なものであろう。物質の変化を楽しむ化学や知的な思考を深める数学の前では、何の色どりもなく、深みもない教科になりかねない。

外国語学習が生き生きと魅惑的に輝くのは、そのことばを使ってコミュニケートしたい相手がいたり、はっきりとした目的があり、そのことばを使ってコミュニケートしたい意欲が高まっている時であろう。そのような時に、言語体系が語彙と文法から成り立っていることを認識すれば、外国語学習も効率よく、方向性をもって進むのではないだろうか。

〈思考の媒介としての言語〉

ことばは、コミュニケーション手段であるとともに、思考の媒介である。

幼児は、言語獲得の過程で物や事物の名称を覚え、ことばで認識する世界を広げていく。ことばの世界の広がりと共に、思考も深く、複雑になっていく。みずみずしい喜びをもたらす発達の過程からも、言語が思考の媒介であることを知ることができるが、また、別の状況からも推測しうる。

既に成人になった聾唖者で、十分に言語教育を受けておらず、口話ができないだけでなく、文字言語の習得も

十分でない場合には、思考法が極めて単純であり、内言語の発達が不十分であることを伺わせる。

いったん正常な言語機能を獲得した後に、脳の損傷のために言語機能が低下することがある。この状態を「失語症」といい、先ず問題になるのは、コミュニケーション障害である。しかし、日常生活での会話には、ほとんど支障がない程度の軽い失語症であっても、判断力や思考力が低下しており、知的な職業に復帰するには、かなりの困難が伴う。

言語障害の種類によっては、内言語の障害はなく、コミュニケーション能力を高めることだけを目的とした言語指導を行うが、その指導がコミュニケーション能力を高めるだけでなく、子どもの認知・思考能力にも影響を及ぼすことを感じることがある。

脳性麻痺の幼児の言語指導をしていた時のことである。他の人が了解しうることばを全く話せなかったので、声を出して人に呼びかけること、更には、聞いて理解できていると確認できた語について、不完全であってもことばとして言う練習を行った。声を出して呼びかけると、人やペープサートが物陰から現れたり、ランプがついて動物の形が見えるのを喜び、身近な人でないと了解できないような発音ながら、声を出して幾つかの語を話すようになった。既に二歳になっていたが、這って移動するレベルであり、体の運動訓練も受けていた。体の訓練の担当者が、「あの子は、ことばの勉強をするようになって、頭が良くなった。」と言ったことが印象的であった。

口蓋裂の子ども達についても、私は、同様の感想を持っている。このシリーズの三回目で報告したように、定期的な発音の指導を受けていない口蓋裂児と健常児とのWPPSI知能診断検査の結果について検討すると、動作性知能指数には差がないにもかかわらず、言語性知能指数については、口蓋裂児の方が劣っている。しかし、週に一回の発音の指導を開始すると、発音が改善するだけでなく、言語能力全体がぐんと伸び、兄達の時には考えられなかった位に早くから自分から文字に関心を

持って絵本を読むようになった、というようなことが多数ある。

Robertsらが、社会経済的に恵まれない境遇の幼児に小集団でのデイ・ケアを行い、子ども達の会話操作能力が高められたこと、知能検査の成績や読みの能力にも好影響を及ぼしたことを報告しているが、このデイ・ケアでは、子どもの言語学習のモデルとなる言語刺激が、かなり多く与えられている。

これらは、いずれも、コミュニケーション手段としてのことばを教えることが、即ち、ことばで認知しうる世界を広げることにもなっているあかしではないかと思う。

ことばの持つ力の大きさを深く感じ、言語の指導に携わる者の資質が、指導される側に、どのように影響するかを考えると、ことの重大さに身が引き締まる思いである。

（聖マリア病院言語治療科）

〈文　献〉

1) Joanne Erwick Roberts et al. Language Skills of Children with Different Preschool Experiences. Journal of Speech and Hearing Research, Vol. 32, 1989.
2) 槇恭子訳『ヘレン・ケラーは、どう教育されたか』明治図書　一九七三年
3) 中野好夫訳『ガリヴァ旅行記』白水社　一九五三年
4) 大河内一男他著『言語』東京大学出版会　一九六七年
5) 大久保愛著『幼児言語の発達』東京堂出版　一九八二年